

欲求と信念が身体的運動をひきおこす。デイヴィドソンの行為の因果説に端を発するこの図式は、われわれにとってなじみ深いものとなっている。しかし、欲求と信念が身体的運動をひきおこしていればそれで充分というわけではない。逸脱因果の問題はこの難点を明らかにしたものと名高いが、この発表では別の観点からこの図式に疑問を投げかける議論を紹介したい。

欲求と信念が身体的運動をひきおこすというとき、われわれが暗に前提しているのは、欲求および信念と、身体的運動の間には行為者が存在しているということである。欲求と信念は行為者に影響を与えるに過ぎず、それらに影響を受けて身体を動かしているのはあくまでも行為者なのである。われわれがこうした考えをもっているということは、われわれがある種の行為に対して自分が適切な仕方に関与していないという思いを抱くことに表れているだろう。そうした行為の例として、われを忘れてやってしまった行為や無抑制な行為を挙げることが出来る。これらの行為がごく普通の行為と違う点は、行為者の知らぬ間に欲求が行為者を動かしていたり、行為者が自分の望まない欲求に動かされているということに存するように思われる。これらの場合、行為者は身体的運動が生じてくるプロセスに適切な仕方に関与してはいないのである。

さて、こうした見方がもつ難点は、行為者という存在者が出来事や状態のみを因果の項と考える因果説ときわめて相性が悪いということである。チザムの唱えた行為者因果が受け入れられなかった理由もここにある。しかし、近年の行為論では行為者が果たすとされている役割を実質的に果たしている心的状態を特定するというプログラムを通じて、行為の因果説の中に行為者因果を取り込もうとする動きが見られる。本発表ではフランクファートの「同化」の考えを発展的に受け継いで、行為者因果を因果説に無理のない仕方に取り入れようとするヴェルマンの考え方を紹介し、検討することにしたい。